

前期 A

〔国語〕

一、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

(A)、「どうして教育を受けなくちゃいけないの？」という問いに対しては、そのような問いがあるとは想像もできずに絶句する、というのが大人の側としては当然の対応のほうです。「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という憲法二十五条の「セイゾン権」について、「どうして健康で文化的な生活を営まなくちゃいけないの？」と問うてくる子どもがいたら、誰だつて絶句するでしょう。もし、こういう基本的な人権について、「それはね」とすらすら「子どもにもわかるような説明」をしてみよう教師がいたら、そういう人間に僕はむしろケイカイ心を抱きます。

しかし、現に経済合理性を動機づけにして子どもを学習に導き入れようとする大人たちがいます。彼らは「勉強すると、これこれこういう『いいこと』があるんだよ」という言い方で子どもたちを功利的に誘導しようとする。勉強すると「いい学校」に入れるし、「尊敬されるポスト」に就けるし、「高い給料」が取れるし、「レベルの高い異性」を配偶者に迎えることができる、というような説明をする。そういう大人がいるというより、今ではもう教師たちも親たちもほとんどがそういう説明に逃げてしまう。子どもに「なぜ学ぶ必要があるのか？」と問いかけられて驚愕のあまり絶句する、という、まっとうな教師、まっとうな親の方がむしろ少数派でしょう。

そういう問いかけそのものが「想定外」なのだといいるところから始めたならば、「教育とは何か？」という根本的な問題に大人たちも子どもたちも向かうことになったのでしよう。しかし、残念ながら現状はそうはなっていない。大人たちもまた「そのような問いかけはあつてしかるべきだし、その問いに対して、子どもたちにもわかるような答えがなければならぬ」と考えている。これが最初の、最大の「ボタンのかけ違い」だと僕は思っています。答えることのできない問いには答えなくてよいのです。

以前テレビ番組の中で、「どうして人を殺してはいけないのですか？」という問いかけをした中学生がいて、その場にいた評論家たちが絶句したという事件がありました(あまりにルフした話なので、もしかすると「都市伝説」かもしれません)。でも、これは「絶句する」というのが正しい対応だったと僕は思います。「そのような問いがありうる」とは思ってもいませんでした」と答えるのが「正解」という問いだつて世の中にはあるんです。もし、絶句するだけでは当の中学生がナツトクしないようでしたら、その場でその中学生の首を絞め上げて、「はい、この状況でもう一度今の問いを私と唱和してください」とお願いするという手もあります。

世界には戦争や災害で学ぶ機会そのものを奪われている子どもたちが無数にいます。他のどんなことよりも教育を受ける機会を切望している数億の子どもたちが世界中に存在することを知らない子どもたちだけが「学ぶことに何の意味があるんですか？」というような問いを口にすることができる。そして、自分たちがそのような問いを口にすることができるということそのものが歴史的に見て例外的な事態なのだといいことを、彼らは知りません。

先ほどの「人を殺してどうしていけないのか？」と問う中学生は「自分が殺される側におかれる可能性」を勘定に入れていません。同じように、「どうして教育を受けなければいけないのか？」と問う小学生は「自分が学びの機会を構造的に奪われた人間になる可能性」を勘定に入れていません。自分が享受している特権に気づいていない人間だけが、そのような「想定外」の問いを口にするので。

(B)、「このような問いかけに対して、今の大人たちは、ダンコとして絶句して、そのような問いは「ありえない」と斥けることができない。絶句しておろするか、「子どもにもわかるような功利的な動機づけで子どもを勉強させようとする。子どもたちは、自分たちの差し出した問いが大人を絶句させるか、あるいは幼い知性でも理解できるような無内容な答えを引き出すか、そのどちらかであることを人生の早い時期に学んでしまいます。これはまことに不幸なことです。というのは、それがある種の達成感を彼らにもたらしめてしまうからです。

(C)、「この最初の成功の記憶によって、子どもたちは以後あらゆることについて、「それが何の役に立つんですか？それが私にどんな『いいこと』をもたらすんですか？」と訊ねるようになります。その答えが気に入れば「やる」し、気に入らなければ「やらない」。そういう採否の基準を人生の早い時期に身体化してしまふ。

こうやって「等価交換する子どもたち」が誕生します。

(内田樹「下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち」より)

問一、波線部 a、e のカタカナを、漢字に改めよ。

問二、(A) (C) に入る最も適切な語を次の中から選び、記号で記せ。

ア そして イ 要するに ウ しかし エ ですから オ もし

問三、傍線部 1「しかし、現に経済合理性を動機づけにして子どもを学習に導き入れようとする大人たちがいます。」について。「経済合理性を動機づけにした」説明とは、具体的にはどういうことか。六十九字で抜き出せ。

問四、傍線部 2「自分が学びの機会を構造的に奪われた人間になる可能性」について、「構造的」に奪われているとはどういうことか。本文中の事例に即して、百字程度で述べよ。

問五、大人が、答えることのできない問いには答えない、という姿勢を取った場合、学校や教育は必要なのではないかという批判がなされるであろう。こうした批判に対して、自由に反論せよ。

二、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ベッドの背もたれに寄りかかり、イシイは目をつぶっていた。管が入ったことで、のどや鼻の違和感^aが強いのだろう。
「イシイさん」

そう言って隆治が肩に手を置くと、イシイはようやく目を開けた。

「ああ、先生」

鼻から管が入っただけでずいぶん^bと人相^bが変わってしまった。

「だいぶ楽になりました。お腹」

「そうですか！」

隆治は喜んだが、（①）嬉しそうな表情を打ち消した。目の前のイシイは全然楽そうに見えなかったからだ。

——これは、俺に気を遣って言うてるんだろうか。

「先生」

イシイが力なく言った。

「はい」

「これって、いつまで入れたままなんですか？」

——どうしよう……。

正直なところ、この先この管が抜ける見込みはあまりない。それはつまり、死ぬまで抜けないということの意味した。しかしそんなことを本人に言うわけにはいかなかった。（②）、ここで返答に間をあけてはならない。顔色一つ、声色一つ変えてはならない。医者は時に役者にならねばならない。

「管から出る液体の量を見ていきますので」

隆治は唇をちよつと舐めて続けた。イシイは隆治が言葉に詰まったのに気づいていないようだった。

「量が減ったら抜けますのでね」

イシイの表情が一瞬曇ったのを隆治は見た。すぐにこう付け加えた。

「数日で抜けると思いますよ」

「そうですか！ じゃあ頑張ります！」

ぱつと表情が明るくなった。

「先生、ありがとうございます」

隆治はとっさに嘘をついてしまった。そんな見込みはまったくなかった。隆治はそう考えていたが、実際は腸液を減らす薬剤を使うと抜けることが多い。（③）隆治にはその知識がまだなかった。

隆治はナースステーションに戻ると、看護師の吉川を見つけた。

「先生どうしたの、暗い顔をして」

——まったく、魔法使いみたいだ。看護師さんって、こっちが何を考えているかわかるんだな。

「いえ、今イシイさんに胃管を挿れてきて」

「あ、わかった。失敗したんですよ？」

吉川が少し笑って聞いてくる。

「いえ、うまくいきましたよ」

「じゃあなんで落ち込んでるの？」

「えっ……」

隆治は少しためらったが、話した。

イシイに「どれくらい挿れておくのか」と聞かれたこと、言葉に一瞬詰まったこと、しかしそれは気づかれなかったこと、そして嘘をついたことを。

「あら、なに馬鹿なこと言ってるのよ先生」

「え……」

「それはね、必要なことだったの。だってそう言った方がいいと思ったし、実際言った方がよかつたんでしょ？」

「ええ、まあ。（④）、ですけど」

「だったらそう言ったっていいのよ。嘘ついたっていいの。それはね、『優しい嘘』なのよ」

「『優しい嘘』ですか？」

「そうよ。先生、大学出てるんでしょ？ しかも医学部出てるんでしょ？ そんなこともわからないのね」

吉川は（⑤）あきれたという顔をして、続けた。

「いいわ。世の中にはね、二つの嘘があるの。一つは人を欺^cく嘘。これは値段をごまかして高く売ったり、結婚してるのにしてないって言ったりして人を騙^dすもの。わかるわよね？」

隆治はうなずいた。

「もう一つは、『優しい嘘』。これはね、人を助ける嘘なのよ。そりゃあね、露骨に思いつきりありえないことを言うのはダメよ。手術するけど、手術後はまったく痛くないですよ、とかはダメ。でもね」

吉川は立ったまま続けた。隆治はじつと吉川の目を見つめた。

「治らない人に、治る見込みは少しはあるかもしれないと言ったっていいでしょ？ 治らない人に、治らないって馬鹿正直に言うのはおかしいと思わない？ そりゃ可能性で言ったら一%もないかもしれないわ。でも、ちよつとくらい希望を持ってもらったっていいじゃない。それが『優しい嘘』よ」

「優しい嘘……」

「なんかわかったようなわかってないような顔ね。先生の言いたいことわかるわよ。『それでも真実を言わないのはよくない』って言いたいでしょ。でも、それでも必要な時はあるの」

「うーん、そんなもんですかねえ……」

「そうよ。この仕事やっているとそんなことしょっちゅうよ。がんの末期の患者さんに『もうすぐ死ぬんですかね』なんて聞かれて『なに馬鹿なこと言ってるの、そんなわけじゃない、しっかりしてちょうだい』ってね。これは本当に必要なことなのよ」

吉川は横を向いて、続けた。

「でもね、『優しい嘘』を言った人には大変な重荷がのしかかることになるの。嘘をついた相手の全部を受け止められるような覚悟がなければ、そして嘘つきとなじられても笑顔で謝れるような気持ちがあれば、『優しい嘘』はついてはいけないの」

「……僕にはそんな覚悟はなかった……」

「大丈夫よ。言ってしまったからでも、それから腹を決めればいいのよ。先生ならできるわよ」

「そうですか。頑張ります」

「ま、あまり深刻に考えないことよ。本当に管、抜けるかもしれないんだから。……あ、ナースコールだから行くわね、じゃね先生」

そう言う吉川はばたばたとナースシューズを鳴らして歩いて行った。

(中山祐次郎『泣くな研修医』による)

問一、波線部 a～e の読みを、ひらがなで記せ。

問二、空欄 (①) (⑤) に入る語句を次の中から一つずつ選び、記号で記せ。

ア おそらく イ つまり ウ しかも エ とつさに オ たしかに カ しかし キ まったく

問三、傍線部 1 「人を助ける嘘」とは、どのような嘘か。そうでない嘘と対比させながら説明せよ。

問四、傍線部 2 「腹を決めればいいのよ」とあるが、何について腹を決めるのか、説明せよ。

問五、次は登場人物「隆治」の紹介文である。これを参考に、登場人物「吉川」の紹介文を作成せよ。

「隆治」は新人医師。真面目で少し気弱。まだ経験や知識が不足する研修医だが、迷いながらも患者には真剣に向き合い、医療者としてあるべき姿を誠実に模索している。

〔国語〕 前期 A

一、

問一	問二	問三			問四			問五
a	A							
b	B							
c	C							
d								
e								

二、

問一	問二	問三	問四	問五
a	①			
b	②			
c	③			
d	④			
e	⑤			

受験地	受験番号					得点欄
						※

※は記入しないこと